

明代『詩經』圖解の變化について

——嘉靖年間以降の圖解三種を中心に——

原田 信

はじめに

南宋の紹興年間に楊甲が編纂した「毛詩正變指南圖」(以下「指南圖」)は當時盛んに参照されたらしく、南宋中期にはすでに多くの版本が刊行されて各地に広まっていた。同時に「指南圖」は書肆や學者により改編され、南宋から元代にかけては様々な『詩經』圖解が登場した。⁽¹⁾

ところが、明代になると『詩經』圖解の多様化は停滞する。この主な原因は、永樂十三年(一四一五)に完成した『詩經大全圖』(以下「大全圖」)の普及だと考えられる。

「大全圖」は勅撰書『詩經大全』の附録である。『詩經大全』を含む『五經大全』は、科擧試験のための教育、學習にあたり準備すべきテキストとして編纂され、全國に頒布

された。「大全圖」も『五經大全』の頒布とともに広まっていた。明代において「大全圖」が盛んに用いられたことは、『五經大全』が永樂年間以後も官衙や書肆によつて度々刊刻されたことや「大全圖」が『詩經大全』以外の書物にも附されていること⁽²⁾、そして各地の學宮に置かれていたことから窺われる。⁽³⁾

このように準備すべき勅撰書の附録という權威を背景とした「大全圖」の普及が、「大全圖」とは異なる『詩經』圖解の編纂を抑制したであろうことは想像に難くない。實際、明清の主要な書目や現存する『詩經』圖解による限り、明代初期から中期にかけて編纂された『詩經』圖解は確認されない。

しかし、嘉靖年間以後になると「大全圖」とは異なる

『詩經』圖解が登場する。筆者が確認したのは全三種、嘉靖年間の編纂と推測される胡賓「詩經圖全集」と胡明勗『新刊詩經集成圖說』、そして萬曆以後の編纂と考えられる『詩經圖史合攷』である⁽⁴⁾。

これらの登場は、「大全圖」の權威や利用に對する意識が變化したことを示している。それでは、その變化とは一體どのようなものであったのか。本論では、宋元の『詩經』圖解や「大全圖」との比較を通じてこの三種の圖解の特徴を明らかにし、これらの圖解が編纂された意圖とその背景から嘉靖以後に起こった『詩經』圖解における變化の内容を考察する。

一、胡賓「詩經圖全集」

明代に編纂された『六經圖全集』には「詩經圖全集」が収録されている⁽⁵⁾。この圖解は卷首に「南京陝西道監察御史胡賓編輯」とあるだけで序や刊記はなく、その編纂經過や時期を示す記載はない。

『六經圖全集』に關するやや早い時期の記載は、祁承燾（一五六三―一六二八）の『澹生堂藏書目』に見える。ただし、ここでは胡賓に言及されていない。その後、鄭敷教

（一五九六―一六七五）は『易經圖考』崇禎十七年自序のなかで「宋紹興中、布衣楊甲著六經圖……迨於我明、侍御胡賓復爲編輯六經、各有圖」と記しており⁽⁶⁾、さらに黃虞稷（一六二九―一六九二）の『千頃堂書目』卷三「經解類」には「胡賓」字汝觀、光州人。嘉靖壬辰進士、兵科給事中」とある。

明代には同姓同名の人物が複数見られるが、字が汝觀、光州の人である胡賓については過庭訓『本朝分省人物考』卷九十三にやや詳しい傳がある。これによれば、胡賓は嘉靖十年（一五三二）の舉人であり、同十四年に廷試を受け、同十七年に皇帝の使者「行人」となったあと、兵科給事中、吏科右給事中、亳州判官、南京太僕寺丞、山西簽事、陝西簽事兼兵備寧夏を歴任し、嘉靖三十六年（一五五七）山西副使に赴任する途上で亡くなったという。

この傳から、胡賓はおおよそ弘治から正徳年間（二四八八―一五二二）に生まれ、嘉靖年間に活動した人物であったことがわかる。

この他、幾つかの地方志にも胡賓の略傳があるが、いずれにも「詩經圖全集」にある「南京陝西道監察御史」に任ぜられたことが見えないため、その具體的な刊刻年代は特

定しがたい。ただし、上述した胡賓の經歷からすれば「詩經圖全集」は彼が仕途についた嘉靖十七年（一五三八）年以後から、亡くなる嘉靖三十六年（一五五七）の間に編纂されたことは疑いない。

「詩經圖全集」に収録される圖解は、表一に示した全三

十八圖である。

「詩經圖全集」の各圖とその内容を明代以前の『詩經圖解と比較すると、「詩經圖全集」には元代の「六經圖碑」の「詩經圖」（以下、名稱の混同を避けるため「六經圖碑」と記す）および明代の「大全圖」と共通する特徴が認められる。

表一 「詩經圖全集」収録の圖

①毛詩小序【碑同】	②思無邪圖【碑同／大同】	③四始圖【碑同／大同】	④正變風雅之圖【碑同／大同】	⑤升歌間歌笙詩之圖【碑同】
⑥詩有六義三經三緯之圖【碑異／大異】	⑦經緯正變之圖（經緯總圖／賦比興兼義圖）【碑同／大異】	⑧十五國風地理之圖【碑同／大同】	⑨靈臺之圖【碑同／大同】	⑩辟塵之圖【碑同／大同】
⑪泮宮之圖【碑同／大同】	⑫皋門應門之圖【碑同／大同】	⑬大東總星之圖【碑同／大同】	⑭楚丘定之方中圖【碑同／大同】	⑮公劉相陰陽圖【碑同／大同】
⑯七月流火之圖【碑同／大同】	⑰豳公七月風化之圖【碑同／大同】	⑱冠服圖【大同】	⑲衣裳圖【大同】	⑳佩用圖【大同】
㉑禮器圖【大同】	㉒樂器圖【大同】	㉓雜器圖【大同】	㉔車制圖【大同】	㉕兵器服圖【大同】
㉖周元戎圖【碑同／大同】	㉗秦小戎圖【碑同／大同】	㉘公車千乘之圖【碑同】	㉙出車一乘之圖【碑同】	⑳～㉛鳥名、獸名、蟲名、魚名、草名、木名、菜名、穀名、金玉【碑同】

※各項目名の後【】内にある「碑」は元の「六經圖碑」、「大」は明の「詩經大全圖」のこと。「碑」や「大」に続く「異」や「同」は、「詩經圖全集」と「六經圖碑」や「詩經大全圖」の圖解に、圖や解説、または項目名の異同があることを示している。

まず、表中、傍線を引いた①「毛詩小序」と②③④の圖解は、圖と解説、ともに「六經圖碑」と同じものである。これらは、現存する明代以前の『詩經』圖解では「六經圖碑」のみに見え、ここから採録したと考えられる。

また、②と⑦、⑧は「六經圖碑」と「大全圖」ともに収録しているが、両者が収録する圖の内容はやや異なる。以下に述べる各圖の異同により、この三圖はいずれも「六經圖碑」から採録されたと考えられる。

②「思無邪圖」は元代の『詩經』圖解に初めて見え、「大全圖」にも収録されているが元代の圖とはやや異なる。「六經圖碑」の「思無邪圖」は中央に「孔子言、詩三百、一言以蔽之、思無邪」の一文があり、この左右に朱熹の「善者可以感發人之善心」と「惡者可以懲創人之逸志」という言葉を配している。これに對して「大全圖」では、圖の兩端にさらに朱熹などの言葉とされる「思無邪、魯頌駉篇之辭。夫子讀詩、至此而有」と「合於其心焉。是以取之、蓋斷章摘句云耳」を加え、その下部に「其用歸於使人得其情思之正」、「情性是貼思」、「正是貼無邪」という言葉を加え、それぞれの關係性を線で結んで示している。「詩經圖全集」の②は「六經圖碑」と同じものである。

⑦「正變風雅之圖」は風、雅、頌の正變に對應する詩を圖示しており、「六經圖碑」と「大全圖」に同様の圖が収録されている。ただし、「大全圖」のほうには、對應する詩に加えて「六經圖碑」にはない朱熹の言葉が附されている。「詩經圖全集」にはこの朱熹の言葉がないため、⑦は「六經圖碑」に由來すると考えられる。

⑧「十五國風地理之圖」と同様の圖は、南宋楊甲の「指南圖」以來、多くの『詩經』圖解に収録されている。ただし、時代によって地名が異なるため、編纂された年代は特定できる。⑧には「遼東、今遼陽省」や「和林城、今嶺北省」といった元代の地名が見える。これらの地名は明代の「大全圖」では削除されることから、⑧は元代の圖解から採録したものである。上述のように「詩經圖全集」が「六經圖碑」によっていることからすれば、この圖のみを他の元代の『詩經』圖解から採録したとは考え難く、おそらくは「六經圖碑」に由來する圖であろう。

次に③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿の圖解は、それぞれ「六經圖碑」と「大全圖」とも同じ圖を収録しているため、「詩經圖全集」がどちらの圖解によったかは明らかにしがたい。

また、表中で網掛けのある、衣服や器物に關する項目

⑮～⑳は、項目の分類と圖ともに「大全圖」と同一である。ただし、「大全圖」にあった各器物の文字説明はすべて削除されている。「六經圖碑」にも類似した項目はあるが、これは「冠服俎豆圭璧之圖」や「樂器舟車戈矛之圖」のように複数の種類をまとめて一つの項目としているうえ、収録している器物が異なる。

このほか、①、⑤、⑥には「六經圖碑」や「大全圖」とは異なる特徴が見られる。①「毛詩小序」は、「六經圖碑」では全二十四圖のうち二十三番目に置かれているが、「詩經圖全集」では一番目に配されている。⑤「升歌間歌笙詩之圖」は、元代以前では「六經圖碑」のみに見える圖である。「六經圖碑」では「經緯正變之圖」の一部だが、「詩經圖全集」では獨立した圖解となっている。⑥「詩有六義三經三緯之圖」は『朱子語類』にみえる「三經三緯」の説、すなわち賦、比、興の「三經」、風、雅、頌の「三緯」と各詩の對應を示した一覽表である。「六經圖碑」や「大全圖」では「三經三緯」の意味を示すだけで、詩との對應は示していない。⑥は「詩經圖全集」以前に類例がなく、おそらく胡賓が「六經圖碑」や「大全圖」にある既成の圖を改編したのだろう。

以上のように「詩經圖全集」の圖には「六經圖碑」と「大全圖」の特徴が見られ、さらにこの二つの圖解とは異なる圖もある。胡賓は「六經圖碑」と「大全圖」をもとに整理、改編を加えて「詩經圖全集」を編纂したと考えられる。

明代には「六經圖碑」に着目した盧謙、章達による萬曆四十二年の繅刻本が現在まで傳わっており、清代になると「六經圖碑」はさらに重んじられ、校訂を加えた圖解が複数編纂された⁹⁾。これらと比べても、「詩經圖全集」は「六經圖碑」に着目した早い時期の圖解である。

胡賓が「六經圖碑」に着目したのは、この圖解が「大全圖」より古いだけではなく、兩圖解の間に異同が存在していたからであろう。そして、その編纂意圖は、萬曆以後の繅刻のように、宋元の「詩經」圖解の年代に價值を見出してそのまま世に廣めるのではなく、あくまで「大全圖」や「六經圖碑」の内容の改編にまで及んでいた。

この改編の意圖を明らかにする上で、①「毛詩小序」の順序が一つの手がかりとなる。表二に示したように「詩經圖全集」の圖の収録順序は、⑫、⑯、⑳、㉑の順序が顛倒している以外、概ね「大全圖」に準じており、その間に

①【碑23】	②【碑1／大1】	③【碑6／大2】	④【碑12／大3】	⑤【碑12】
⑥【碑11／大4】	⑦【碑12／大4】	⑧【碑7／大5】	⑨【碑13／大6】	⑩【碑14／大6】
⑪【碑15／大8】	⑫【碑12／大7】	⑬【碑3／大9】	⑭【碑4／大11】	⑮【碑5／大12】
⑯【碑2／大10】	⑰【碑8／大13】	⑱【大14】	⑲【大15】	⑳【大16】
㉑【大17】	㉒【大18】	㉓【大19】	㉔【大20】	㉕【大23】
㉖【碑17／大21】	㉗【碑18／大22】	㉘【碑19】	㉙【碑20】	㉚㉛㉜【碑24】

表二 「詩經圖全集」と「六經圖碑」、「大全圖」における圖解収録順序の對應

「六經圖碑」の圖を加えている。ところが、①「毛詩小序」だけは、「六經圖碑」と「大全圖」ではともに冒頭にあって「思無邪圖」の前に置かれている。

小序は漢代以來『詩』を解釋する上で重要な根據の一つであった。『詩經』圖解では南宋の「指南圖」がその冒頭の圖「詩篇名」に小序を収録していたが、元代になると、「六經圖碑」は小序を末尾に収録し、冒頭には朱熹の言説を圖示した「思無邪圖」を配した。「六經圖碑」の編者が小序よりも「思無邪圖」を優先させたこと、そして明代の「大全圖」もこれを踏襲したことは、この時期に朱子の經學が科擧の基準となつたことと關係している。これに對して「詩經圖全集」が「毛詩小序」を冒頭に置き「思無邪

圖」より先に示したのは、胡賓が『詩經』の解釋や學習において小序をより重視したからであろう。

明代の『詩經』解釋は、「詩經圖全集」が編纂される嘉靖年間より前に一つの轉換期を迎えていた。まず、天順元年（一四五七）に楊守陳が『詩私抄』の中で朱熹の言説に拘らず、詩序に基づいた漢唐の註疏を『詩經』の解釋に取り入れたことで、小序は次第に重んじられるようになった。そして、この影響を受けて弘治、正徳年間にかけての學者、例えば王鏊や陳鳳梧、陸深などは、朱熹の言説を支持しながらも小序や諸家の説を廣く採用することを提起した。これは、ちょうど胡賓が生まれたと推測される時期のことである。

圖一 「詩經圖全集」の「毛詩小序」

詩經圖全集二卷		
南京陝西道監察御史胡寅編輯		
國風		
毛詩小序	關雎后妃之德也	卷耳后妃之志也
摽杵后妃逮下也	采芣后妃之德也	桃夭后妃之所致也
兔置后妃之化也	采芣后妃之德也	漢廣惠廣所及也
汝墳道化行也	麟之趾關雎之應也	鵲巢夫人之德也
采芣夫人不失職也	采芣大夫妻自形也	采蘋大夫妻

胡寅が「毛詩小序」を冒頭に配したと、ひいては既に廣く参照されていた「大全圖」に對して「六經圖碑」の價値に着目し「詩經圖全集」を編纂したことに、當時起こつた『詩經』解釋の變化が関わつていた可能性が考えられる(圖一)。

二、胡明勗『新刊詩經集成圖說』

嘉靖年間には、もう一つ「大全圖」とは異なる圖解が編

纂された。胡明勗『新刊詩經集成圖說』(以下『集成圖說』と略する)である。

『集成圖說』は卷頭に嘉靖庚戌(二十九年・一五五〇年)羅田鄉(湖北省黃岡市羅田縣)進士胡明通の序があり、これ以前に編纂されたものである。

編者の胡明勗は、胡明通の序に字は汝召、號は龍田、胡明通の從兄であり北渠夫子の子と記されている。また、卷首に「湖廣羅田縣後學胡明勗輯著 門下庠生胡泮校正 庠生高德脩全校」とあり、編輯に門下の學生が加わつてゐることからして、彼は羅田で學問を教授してゐた人物だろう。過庭訓『本朝分省人物考』卷七十八にある胡明通の傳によると、序を記した胡明通は兄の胡明庶と同時に舉人となり、その後は金華府通判となつた。また、同書に見える胡明庶の傳によると、胡明庶は先述した「詩經圖全集」の編者胡寅と同じ嘉靖壬辰の進士である。これらのことからすれば、胡明勗は同地の有力な一族の出身者であつたらしい。

現存する『集成圖說』は稿本であり、國風のうち周南、召南、邶風の三風を收めた第一卷が傳わつてゐる。『集成圖說』は書名に「新刊」とあるほか、卷首には「書林就正

齋梓行」とあり刊行を豫定していたようである。しかし、同圖解に關する記載は明代の書目に見えず、刊本も傳わっていない。

『集成圖說』全體の構成は序の後に附された「立意」に説明がある。ここに記された各項目とその役割は表三のようになる。

全體の構成は八つの部分から成つており、末尾の⑧が圖解である。⑧は「以て一篇の脈絡を示す」というように、各詩の末尾に附あつて詩の章ごとの要旨を圖示している。また、「立意」には見えないが、周南、召南、邶風の末尾には、各風の構成とその意義を示した圖も掲げられている。(圖二、圖三)。

『集成圖說』の編纂は、「立意」に①「使人便看」や⑤「以見前後旨意之妙」とあり、『詩經』各詩篇の概要や要旨、意義を効率よく、容易に理解させることを目的としていた。これは、胡明通の序に「誠に舉業の指南」とあるよ

表三 『新刊詩經集成圖說』の「立意」八項

①【全題】使人便看	②【講語】以明其理	③【主意】以說其詳	④【破】以盡一章之意
⑤【合題】以見前後旨意之妙	⑥【全意】以括全章之意	⑦【全破】以該一詩之蘊	⑧【全圖】以示一篇之脈絡

うに、本書が科舉受験の参考書として編纂されたからである。このため、その内容は『詩經大全』によつたのだろうが、受験用の文章教材「時文」を引用する以外に諸家の解釋は全く見えず、『詩經』の解釋においては新たな見解を示してはいない。⑧の圖解も受験参考書の一部として、學習者が各詩や風、雅、頌の構成を効率的に把握するために作成されたものである。

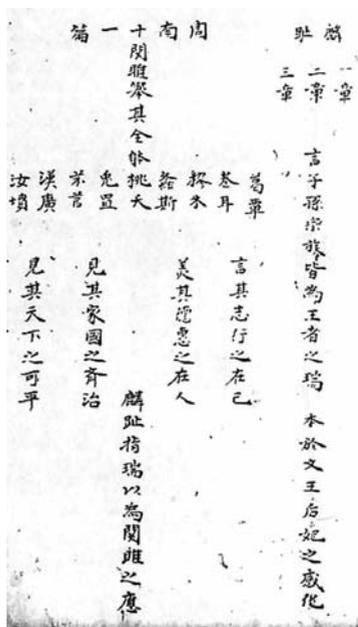
現存する圖解による限り、詩や詩篇ごとの構成の要旨や意義を圖示したのは『集成圖說』が早期のものであり、後世にも見られない。

ただし、やや類似した形式の圖は、『集成圖說』以前の『詩經』圖解にも見られる。例えば、元代の圖解や「大全

圖二 『集成圖說』の「關雎圖」

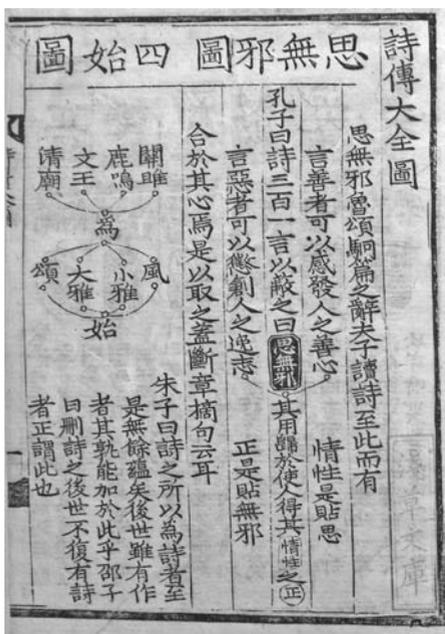


圖三 『集成圖說』の「麟趾圖」と「周南十二篇圖」



「圖」の冒頭にある「思無邪圖」は、「思無邪」に関する孔子と朱熹の言葉の關係性を圖示したものである。さらに「四始圖」も同様の圖解である（圖四）。これを『詩經』の各詩篇に應用して圖示すれば『集成圖說』の圖解となる。このような圖は一般的に描かれたであろうが、胡明昴は「思無邪圖」や「四始圖」のように「大全圖」を通じて廣く參照されていた圖解に着想を得て作成し、『集成圖說』の一部に加えたのかもしれない（圖四）。

圖四 「思無邪圖」と「四始圖」（内閣文庫藏成化本『詩經大全』）



三、鍾惺『詩經圖史合攷』

鍾惺（一五七四—一六二四）の『詩經圖史合攷』（以下『合攷』）も、「大全圖」とは異なる圖解である¹⁾。本書については、鍾惺に假託されたもので明末に編纂されたものとする指摘がある²⁾。

『合攷』は、専ら『詩經』の名物に関する註釋や諸書の記載を輯録している。全部で一五五〇種餘りの事物を収録

	圖解名稱	卷	
①	周南圖 附十五国風地理之圖	一	元代の『詩經』圖解か。
②	琴瑟圖	一	「瑟」に『樂書』を引用。
③	鐘鼓圖	一	「鐘」に『樂書』を引用。
④	篴管圖	一	「篴」に北宋の『三禮圖』と『禮書』を引用。
⑤	疊兒觥圖	一	無し。 『三禮圖』、『禮書』、元代の『詩經』圖解か。
⑥	干圖	一	「干」に『禮書』を引用。
⑦	三五參昂圖	二	無し。
⑧	兵舞帔舞圖	三	無し。 『三禮圖』、『禮書』、元代の『詩經』圖解か。
⑨	羽舞皇舞旄舞圖	三	無し。 『三禮圖』、『禮書』、元代の『詩經』圖解か。
⑩	爵籥圖	三	「爵」に『三禮圖』と『禮書』、「籥」に『樂書』を引用。

表四 『詩經圖史合攷』収録の圖

するが、圖は十七種のみに附されている（表四）。これらの圖は、各事物の記載に引用される書名や他の圖解との比較から、ほぼすべて他書からの採録であると考えられる。

まず、表中の②から④、⑥、⑩、⑪、⑬、⑰の圖と對應する解説には、禮樂の圖解本である北宋の聶崇義『三禮

圖』や陳祥道『禮書』、陳暢『樂書』が引用されており、それぞれ『合攷』と同様の圖が収録されている。⑤、⑧、⑨、⑭、⑮は解説に圖解本の引用はないが、いずれも『三禮圖』などの圖解本に同様の圖が見える。⑤、⑧、⑨、⑭、⑮の圖の解説に圖解本の引用は無いが、やはり『三禮圖』などに収録されている圖解である。

	圖解名稱	卷	解説に引用のある、または推測される圖解（後者は白黒反転）
⑪	佩圖	五	「佩」に『三禮圖』と『禮書』を引用。
⑫	小戎圖（總目錄のみ）	八	
⑬	籩豆圖	十	「籩」に陳祥道『禮書』、「豆」に聶崇義『三禮圖』を引用。
⑭	袞衣圖	十	無し。 『三禮圖』、『禮書』、元代の『詩經』圖解か。
⑮	填篋圖	十三	無し。 『三禮圖』、『禮書』、元代の『詩經』圖解か。
⑯	箕圖 畢斗附	十三	無し。
⑰	笙磬圖	十三	「笙磬」に『樂書』を引用。
⑱	辟雍圖 泮宮圖	十六	無し。 『指南圖』か。

※圖解の名稱は、圖に附されている名稱に準じ、附されていないものは、總目錄の名稱を記した。また、引用あるいは推測される圖解の箇所に記した『三禮圖』の編者は北宋の聶崇義、同じく『禮書』は北宋の陳祥道、『樂書』は北宋の陳暢である。

引用文献のみによれば、『合攷』はこれら禮樂の圖解から圖を採録したように思われる。ただし、同様の圖は『詩經』圖解にもあり、これらの引用と圖だけでは、どちらから採録したかは断定しがたい。

一方、『合攷』の編者が確實に『詩經』圖解を参照したことがわかるのは、①と⑱である。この二つの圖は先述した禮樂や他の經書の圖解本ではなく、『詩經』の圖解のみ

に見える。

①「周南圖附十五國風地理之圖」は先述した胡賓「詩經圖全集」と同じく、「遼東、今遼陽省」や「和林城、今嶺北省」といった、元代の『詩經』圖解にあつて明代の「大全圖」では削除された地名があり、元代の圖解から採録したと考えられる。

元代の『詩經』圖解のなかでも、地理圖は「六經圖碑」

と羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の「詩傳圖」に見える。『合攷』の表記は「和林城」を中央に記し、その左右に「今嶺北省」を配する後者に近い。しかし、『合攷』の表記は「和」が「嶺」に續いており、一見すると意味が取りづらい。これは編輯の際に誤ったのであろう。『合攷』の編者は『詩經』圖解より圖を採録したが、その内容にはあまり關心がなかったといえる(圖五)。

⑱「辟雍圖泮宮圖」は南宋の「指南圖」と同一の圖である。「指南圖」の辟雍や泮宮は線によって建築物の位置關係を示した簡略な圖である。このような圖は「指南圖」のみに見え、やや後の紹熙年間(一一九〇～一一九四)に編纂された『纂圖互註毛詩』の附録「毛詩舉要圖」に辟雍や泮宮の形狀を描いた圖が収録されて以後、現存する『詩

圖五 「和林城」の表記(上)『合攷』・中「六經圖碑」・下『詩集傳名物鈔音釋纂輯』光緒翻刻本)



明代『詩經』圖解の變化について(原田)

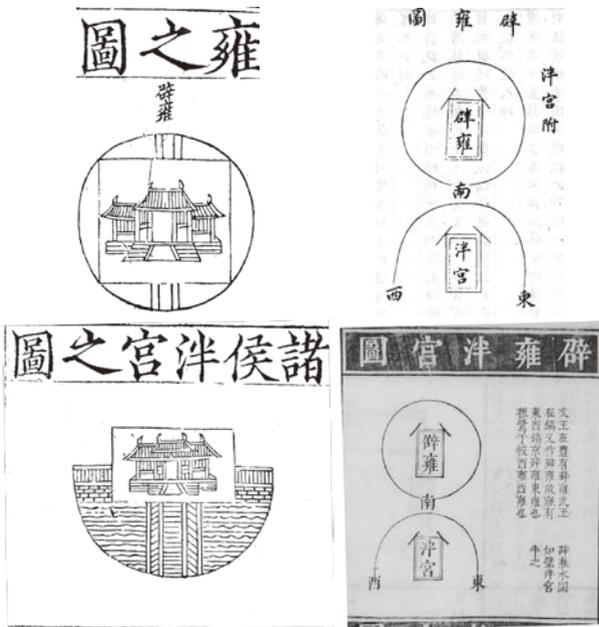
經』圖解は「指南圖」の翻刻本を除いて例外なく「毛詩舉要圖」と同じ圖を収録している。明代には萬曆四十三年(一六一五)に吳繼仕が家藏の『六經圖』を翻刻して以後、複数の人物が翻刻し、「指南圖」を附した書物も刊刻された。⑯『合攷』は當時複数翻刻された「指南圖」から辟雍・泮宮圖を採録したのでろう(圖六)。

⑦と⑱の天文圖は、解説の引用に圖解本が見られない。また、先述した禮樂の圖解本や『詩經』圖解にも収録されていない。だが、『合攷』が刊刻されたと推測されるのと同時期の圖解本、例えば萬曆三十七年(一六〇九)刊刻の圖解類書『三才圖會』には⑦や⑱を含む天文圖が収録されているなど、他書の圖を採録した可能性がある。

『合攷』に収録されている圖は全項目の百分の一程度であり、しかも圖の多くは他書からの採録と推測される。また、①の地理圖に見える表記の崩れ方は、『合攷』の編者が圖の内容をあまり重視していなかったことを示している。

このように、同書は『圖史合攷』と稱しながら、圖が註釋として大きな役割を果たしているとは言いがたい。しかし、『合攷』が圖と複数の文献の記載を合わせ示している点、そして、それまでには見られない天文圖を収録してい

圖六 辟雍・泮宮圖（右上『合攷』・右下「指南圖」・左「毛詩舉要圖」）



る點は、他の『詩經』圖解に類例を見ない特徴である。

『合攷』は圖に限らず、一五五〇種餘りという膨大な事物をの記載もほぼすべて他書からの採録である。さらに、

その採録は多岐にわたっており、なかには『詩經』の解釋と關係ないものもある。『合攷』は書名に『詩經』と冠してはいるものの、實際には『詩經』の名物にまつわる種々の記載を輯録した類書である。

その雑多ともいえる體裁は、清代になると經學を尊ぶ觀點から批判された¹⁷⁾。しかし、『合攷』の編者は經書である『詩經』の解釋よりも類書の體裁をとることで、『詩經』の名物に關する多様な知識を讀者に提供しようとしたのではないだろうか。

南宋以來の「指南圖」を原型とする『詩經』圖解は、その多くが科擧の學習に供するために作成された¹⁸⁾。これに對して、『合攷』は博物的な知識を提供する意圖から編纂された。この編纂意圖の違いのために、『合攷』は南宋の「指南圖」以來の『詩經』圖解をそのまま踏襲するのではなく、「指南圖」や元代の圖解の一部を採録しながら、それまでの『詩經』圖解にはなかつた天文圖をも加えた、新たな『詩經』圖解になつたと考えられる。

おわりに

本論では明代の圖解三種、嘉靖年間の胡賓「詩經圖全

集」、嘉靖二十九年の胡明勗『新刊詩經集成圖說』、明末の鍾惺『詩經圖史合攷』の内容とそれまでの『詩經』圖解との比較を通じて、この三種の圖解の特徴と編纂背景を考察した。

まず、内容面から見れば、元の「六經圖碑」と明の「大全圖」を改編した胡賓「詩經圖全集」は、圖の採録や順序など、一部の圖解を除いてほぼどちらかの圖解に依據しており、南宋の「指南圖」以來續いてきた『詩經』圖解の變遷過程なかに位置づけられる。

鍾惺「合攷」は、複数の解説と圖を對應させたり、新たな天文圖を加えたりと、従来の『詩經』圖解とは相當異なる。ただし、地理圖は『詩經』圖解から採録したと考えられ、もし禮樂關係の圖解も『詩經』圖解から採録したとすれば、ほとんどの圖は南宋の「指南圖」と元の「六經圖碑」に由来しており、實質的には「詩經圖全集」と同じく南宋以來の『詩經』圖解變遷の過程のなかにある圖解といふことができよう。

これに對して、胡明勗『新刊詩經集成圖說』は、元代の圖解や「大全圖」に着想を得た可能性はあるとはいへ、それまでには見られない特色をもった圖解である。

しかし、編纂意圖の面からみれば、『集成圖說』はそれまでの『詩經』圖解の編纂目的であった科擧と深く関わっており、従来の『詩經』圖解變遷の流れのなかにあったといえる。『集成圖說』が従来の圖解と異なっていたのは、參考資料であった圖の役割を『詩經』本文の學習にまで廣げたことにある。

科擧における『詩經』圖解の役割は、『詩經大全』の凡例が「大全圖」を收録した意圖を「以て觀覽に備える」というように、あくまで學習者の參考に供するためのものであった。胡賓「詩經圖全集」も大部分を従来の圖解によっていることからすれば、おそらくは參考資料として編纂されたものだろう。

一方、胡明勗『集成圖說』は『詩經』の各詩、各篇の構成が持つ意義や要旨を圖示する、つまり、圖をより實踐的な學習に應用したことで、それまでに類例を見ない圖解となった。

これとは對照的に、従来の『詩經』圖解とは全く異なる意圖で編纂されたのは、鍾惺「合攷」である。内容面ではそれまでの『詩經』圖解變遷の過程にあったといえるが、その編纂意圖は『詩經』の解釋や學習のみならず、『詩經』

の名物に關連する様々な知識を提供することであった。この點は、従来の『詩經』圖解には見られなかつた特徴である。

以上のように、三種の『詩經』圖解からは、「大全圖」とは異なる『詩經』圖解の編纂が嘉靖年間ころに始まつたこと、そしてこの動きからは、まず宋元以來の『詩經』圖解の編纂目的であつた科擧のために編纂された圖解が現れ、その後科擧や『詩經』の解釋よりも博物的な知識を提供しようという意圖から編纂された圖解が現れたことが明らかとなつた。

本論で論じたような新たな『詩經』圖解の編纂は、清代以後にも僅かながら起こつた。康熙四十六年（一七〇七）の高儕鶴『詩經圖譜慧解』は『詩經』の景物を圖示し、乾隆三十六年（一七七二）の徐鼎『毛詩名物圖說』は動植物を圖示しており、ともに従来の『詩經』圖解とは異なつてゐる。特に後者は中國のみならず、日本にも傳わつて廣く参照されており、動植物を多く収録した日本の『詩經』圖解について考える上でも重要な圖解である。

明代に起こつた新たな『詩經』圖解の編纂とその背景は、後の『詩經』圖解の特徴や『詩經』注釋としての意義

を明らかにする手がかりの一つとなるだろう。本論で考察した結果を踏まえて、さらに清代や日本の『詩經』圖解の展開についても考察を加えてみたい。

注

(1) 「毛詩正變指南圖」を原型とする『詩經』圖解變遷の經過について、筆者は論文「『詩經』圖解本の變遷——宋から明初まで——」（早稻田大學中國文學會「中國文學研究」第三十八期）および「詩經大全圖と詩傳圖——明清期の勅撰『詩經』圖解について——」（同誌第三十九期）にて論じた。

(2) 「大全圖」の鵜刻は、筆者が實見したものとや書目の記載を含めて、官刻本や坊刻本など少なくとも十種以上が確認される。また、『詩經大全』以外にも元の朱公遷『詩經疏義會通』安正堂重刊本（靜嘉堂文庫藏）が『詩經大全圖』を、同書の別版（同上藏）や正統十二年の司禮監刊『詩集傳』が『詩圖』を収録している。「詩圖」の内容は「詩經大全圖」と同一である。詳細は筆者論文「詩經大全圖と詩傳圖——明清期の勅撰『詩經』圖解について——」の註釋（十四）（十六）を参照。

(3) 萬曆四十二年の盧謙、章達編『五經圖』（元代「六經圖碑」の鵜刻本）李維楨序に「國家頒五經大全、學宮皆有圖」とあるのによる。

(4) このほか嘉靖十五年の呂柟、衛良相『詩樂圖譜』は『詩經』をもとに作成された樂曲の演奏に用いる樂器等を圖示してい

- る。同書は『詩經』の解釋とは関わらず、南宋以來の『詩經』圖解とは編纂目的が根本的に異なるため、本論では取り上げなかった。また、この他にも嘉靖年間に編纂されたと考えられる王循吉『五經圖說』がある。同圖は『千頃堂書目』卷三「經解類」に記載が見えるのみで現存が確認されない。
- (5) 本論では國家圖書館藏本（徐乃昌舊藏書、一三〇七）を用いた。
- (6) 朱彝尊『經義考』卷六十四に見える。
- (7) 「大全圖」は「六經圖碑」とは異なる元代の羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の「詩傳圖」と劉瑾『詩傳通釋』の「諸國世次圖」、「作詩時世圖」をそのまま収録しているだけであること、そして永樂十三年に「大全圖」が頒布されてからすでに百数十年を経た嘉靖年間ではまず「大全圖」を参照した可能性が高いことから、以下では一々羅復や劉瑾の圖を挙げず、「大全圖」に統一して述べる。
- (8) 「思無邪、魯頌駟篇之辭」は南宋の眞德秀『西山讀書記』卷二十三「易要指」などに朱熹の言葉として引かれているが、『朱子語類』などには見えない。「夫子讀詩、至此而有合於其心焉」は『詩經大全』の底本である元の劉瑾『詩傳通釋』などに「蘇氏」の言葉として引かれている。「情性是貼思」、「正是貼無邪」は『朱子語類』卷二十三「論語」の「詩三百章」に朱熹の言葉として見える。

(9) 鵬刻本には盧雲英重刻『五經圖』（雍正二年）、校訂本には江爲龍『朱子六經圖』（康熙四十八年）、王皓『六經圖』（乾隆

五年）、鄭之僑『六經圖』（乾隆八年）、楊魁植『九經圖』（乾隆三十七年）、牟欽元『六經圖』（道光二十五年）などがある。

(10) 元、明の『詩經』圖解と朱子學の關わりについて、筆者は「詩經大全圖」と「詩傳圖」―明清期の勅撰『詩經』圖解について―（早稻田大學中國文學會編『中國文學研究』第三十九期）の中で考察した。

(11) 朱彝尊『經義考』卷百十二が引く楊守陳『詩私抄』自序による。また、正徳から嘉靖年間にかけての學者の見解、例えば王鏊の「詩小序序」や陳鳳梧『毛詩集解』自序、陸深『儼山詩徵』自序なども『經義考』同卷に見える。

(12) 國會圖書館所藏の國會圖書館攝製北平圖書館善本書膠片（Y D七五―二三八）による。原本は臺灣故宮博物院所藏。現存するのは卷一、周南十一篇、召南十四篇、邶風十九篇である。邶風の最後に胡明勗の按語があることから、邶風までが卷一だったようである。ただし、マイクロフィルムには「殘存八卷」とある。

(13) 『集成圖說』は殘卷であり全體の内容は不詳だが、時文を引用したことは「立意」に明示されている。

(14) 本論では吉林省圖書館藏明末刻本（『四庫全書存目叢書』經部・第六四冊）を用いた。

(15) 陳廣宏『鍾惺年譜』（復旦大學出版社 一九九三）傳略には、鄒漪『啓禎野乘』卷七の「鍾學憲傳」にある「公書既行於世、諸評斷小語皆布流海內、竊附者或僞託以傳、然而莫能私焉」という記載を引いた上で鍾惺の評選の著作が世間で人氣を博

したため、その名に託した書物が多かったと述べている。また、李先耕『鍾惺著述考』（黒龍江大學出版社 二〇〇八）四〇頁は國家圖書館所藏『詩經圖史合攷』の擁萬堂刊本を例に、この書肆が鍾惺の名義を用いて書物を多く刊刻していたことを指摘している。

(16) 吳繼仕のあと萬曆四十四年にかけて、衛承芳、郭若維が『六經圖』を镌刻しているほか、徐奮鵬『詩經刪補』、顧起元『詩經金丹』の巻頭付録に「指南圖」がみえ、崇禎十一年には陳重光が「指南圖」の單行本を镌刻している。

(17) 『四庫全書總目』は「合攷」を批判するなかでその特徴を「是書雜考詩之名物典故、亦間繪圖故稱圖史合攷。然名雖釋經、實則隸事。如周南桃夭篇首引本草綱目載桃仁去瘀血桃梟療中惡腹痛一條……（中略）……次引列仙傳綏山桃一條、其文遂畢於經義一字無關。全書所載皆類於此、不知其何所取也」と概括している。

(18) 「指南圖」を原型とする圖解が科擧と深く関わっていたことについて、筆者論文「『詩經』註釋史における「毛詩擧要圖」の意義」（『日本中國學會報』第六十四號 一四三～一五五頁）や本論註釋一に記した二篇の論文のなかで論じた。

※本稿は平成二十六年年度科擧費若手研究（B）「17世紀以降の日中における『詩經』圖解の展開に關する研究」（研究課題番號：25770137）の成果の一部である。

* * *

作者：原田 信

Author：HARADA Makoto

標題：關於明代詩經圖解的變化——以嘉靖以降的三種圖解為主

Title：Differences in the Various Illustrations about *Shi jing* 『詩經』 of Ming Dynasty — Three Kinds of Illustrations published since the Jiajing 嘉靖 Period —

摘要：明代前期、朝廷頒布了敕撰書《詩經大全》後、其附錄〈詩經大全圖〉普及到全國各地、佔據了詩經圖解的主要地位。然而、嘉靖以降出現了與此不同的三種詩經圖解本：胡賓《詩經圖全集》、胡明勗《新刊詩經集成圖說》、鍾惺《詩經圖史合攷》。這些詩經圖解的出現意味著、嘉靖以降對〈詩經大全圖〉的認識與詩經圖解的利用方法有所變化。本文通過這些圖解本的特徵與編纂意圖來分析其間發生的變化之細節。

關鍵詞：《詩經圖全集》《新刊詩經集成圖說》《詩經圖史合攷》〈六經圖碑〉〈詩經大全圖〉